

伝文

日本口承文芸学会会報
第2号 1988年2月

発行 日本口承文芸学会
〒160 東京都新宿区西新宿8-4-5
(財)ラポ国際交流センター気付
電話 03-367-2431 内線248

学会への提言

日本口承文芸学会は10年前の創立以来その英語名を Society for Folk-Narrative of Japan としてきた。これは世界の学会である International Society for Folk-Narrative Research を踏襲した命名であったかと思われる。

しかしながら「口承文芸」と folk narrative とは明らかに違ったものである。周知のように柳田国男のいう口承文芸は昔話のほかにも民謡、ことわざ、なぞなぞ、唱え言、命名等を含む広い範囲の文芸を指示する用語であり、コスカンの littérature orale あるいはスティス・トンブソンの oral literature に触発された、あるいは準じた用語である。

ところが narrative というのは story とか tale とほぼ同義の語であるから folk narrative とい

荒木博之
った場合、民謡、ことわざ、なぞなぞ、唱え言などはその指示範囲のなかに入っていないことになってしまう。

もっとも1989年のブダペストで開かれる世界の Folk-Narrative の special topics として Finno-Ugric Folk Poetries が挙げられているので民謡なども包含するものとも考えられるが、こういった folk poetries は通常「物語」性をもったものであり、narrative であることに変わりはない。

いずれにしろ「口承文芸」には oral literature の方がよりピタリとすると思われるが、この用語も literature というのは「書かれたもの」という含意をもっている所以で oral と literature はそれ自身矛盾した用語であるという説もあって難点が無いわけではない。

第1回研究例会「口承文芸と落語」

口承文芸と落語。口承文芸と落語とは相對峙しているのか、あるいは口承文芸としての落語という枠組みで捉えられるのか。いずれにしても従来、十分に論じられたことのないテーマである。講師は川田順造、宮田登、小澤俊夫。

川田は「はなしの演戯性」と題してパフォーマンスの面から落語を論じた。特に八代目桂文楽と五代目古今亭志ん生の演戯を比較して、前者がテキストをきっちり守るのに対して後者が自由自在に変化することなどを分析した。

宮田は「都市民俗としての落語」を論じた。落語の中に現れる都市の民俗を「野ざらし」「駱駝」「藪入り」「王子の狐」「ぞろぞろ」等を具体例

高木史人
として考えた。宮田によると噺家とは笑われる存在でありながらも都市民の心意を代弁するシャーマンであるという。

宮田の発表後小澤幹雄（おさわり亭ぼん助）による「船徳」の実演があった。続いて、小澤俊夫は「落語と昔話の様式」とを比較してその違いを論じた。それによると昔話はストーリーが一本の単線を進んでいくのに対して落語はしばしば支線にそれていくという。また落語はほとんどが会話文であるという。

この後、桜井徳太郎、福田晃、野村純一、関敬吾からの質問、意見があった。詳しくは『口承文芸研究』第11号に報告される。

第2回研究例会「口承文芸とシャーマニズム」

依田 千百子

11月21日、第2回研究例会が開催され、西角井正大氏の司会のもとに次の三氏の研究報告が行われた。

石井正己氏の「巫覡と始祖伝承」は、日本口承文芸のジャンルからはみ出た始祖伝承に神話としての性格を認めた上で、多くの資料を収集し鋭い考察を加えた研究報告であった。東北のボサマ、ザトノボウといわれる盲僧やオカミサマ、イタコ、オナカマといわれる盲巫の始祖伝承は、文書レベル、寺社縁起レベル、口承レベル（祭文と語り）の三つのレベルに分けられるという。文書としては、盲僧の伝承に岩手県の「小宮太子一代記」と青森県の「座頭の由来」があり、両者は深い関わりがあるが、地域的な独自性もみられる。「小宮太子」を始祖とする文書は熊本県からも発見されている。盲巫の始祖伝承には青森県の『梓神子の由来』が数冊あるが、それらは山形県の「朝日の出和歌神子由来」と酷似している。また寺社縁起としては、天台宗から独立した盲人の宗教法人大和宗の縁起があるが、これには文書や口承の伝承が深く関わったらしい。文字を持たない盲人が直接関わったのは口承の伝承であり、大乘寺関係者は大和宗の縁起の影響を強く受けているが、なお豊かな始祖伝承を伝えている。なかには「祭文」として語られた例があり、盲人たちが始祖伝承をこのような形態で管理してきたことがわかる。始祖伝承が披露された場としては、妙音講が考えられる等の指摘がなされた。

神田より子氏の「巫女の系譜」では、陸中沿岸地域の神子について、分布、藩政期の記録、活動状況、成巫過程、神子の唱え言統計、儀礼のプロセスに亘っての詳細な研究報告がなされた。神子サマは晴眼の修業型巫女であるが、修験山伏、法師たちと組んでおもに湯立託宣を行っていたため、今まで盲目のイタコや神ツキのオカミサマなど東北の巫女の研究領域から取り残されていた。しか

し日本の巫女の系譜を考えるばあい注目すべき存在である。なかでも「大事ゆるし」という成巫儀礼において神ツキの儀礼がないことは重要である。また神子は経文や祭文を唱えて神々をよび、護法を使ってその力によって託宣や祈禱を行うのであるが、彼女たちは神ツキではないので、正統シャーマンではないが、神霊や祖霊を操作する力を持った存在として、逆に真性シャーマンといえることができるかもしれないという。この神田氏の報告を契機に今後日本の他地域や、さらに東アジアにおける修業型シャーマンの組織的研究の展開が期待される。

板谷徹氏の「朝鮮半島の巫俗儀礼」では黄海道の巫女禹玉珠の巫儀を事例として、ビデオ映画を上映しながら朝鮮の巫俗の紹介と特徴について報告された。朝鮮の巫祭は請拝、神請、接神、舞、ファリムコンス、才談、遊び、占、コンス（託宣）、献饌、送神から構成されているが、その中心は託宣である。託宣に至るには巫女が憑依状態に入ることが必要であり、そのために舞が行われる。このような機能の他に舞の機能はもう一つある。黄海道の巫儀をみると、巫女は激しい神のばあい斧を振り上げて施舞するが、静かな神のときには神を遊ばせるように舞う。神の具体性を身体につけていくという形で憑依が完成されていくのだという。イタコのような個人レベルの託宣には舞は不要であるが、託宣自体が共同体性を確保する必要があるばあいに舞が必要になってくるのではないか。ここでは舞の共同体性についての問題提起がなされた。

発表後、出席者の中から朝鮮の巫俗儀礼の定型化の時期、神子サマの巫儀中の舞の重要性、始祖伝承と死霊祭の関係、巫術の時間的制約の有無、五方神旗に関する質問が出され、報告者との間に活発な質疑応答がなされた。

《仲間たち》

島根大学昔話研究会

田中 瑩 一

島根大学教育学部の学生を主体に、卒業生も参加して島根県内各地の民話調査を行い、その文字化資料集を刊行して来ました。会としての日常的・継続的な研究活動は特に行わず、春・夏の大学の休暇期間中に、田中が主宰する「児童文学・国語教育ゼミ」のメンバーで現地に着宿して採訪調査を行い、帰学後その成果を文字化して「民話集」にまとめるとともに、メンバーの1人がその資料にもとづいて卒業論文をまとめるといった形の活動を続けております。

昭和47年発足以来、今日までの間には研究環境に様々な変容がありました。昭和40年代のインフォーマントの多くは明治20年代生れの方で、1集落にたいして1人2人は20話程度の伝承者がいましたが、いまではほとんど大正生れの方にかわり、1人10話の伝承者に会えば狂喜するといった感じになりました。録音機材にも時代の流れが感じられます。オープンリールからカセットに切替えたのが昭和48年、当時の録音は音質の劣化がすすんでいます。来年中にはせめてなんとかD・A・Tテープに移したいと考えているところです。又、当初は学生がほとんどテープレコーダーを持っていませんでしたのに、やがて各自が持参できる時代が来、次いでその機材が大型化し再び持参出来ない時代がやってきました。今は又小型化しましたが、今度は車時代になって、村を歩くことがなくなりました。これが口頭伝承の研究にどんな影響を与えることになるか——最近私の頭に時々浮かんでくる問題はこれです。

これまでの本会の調査地をあげますと次のとおりです。

横田町、大田市、大和村、匹見町、隠岐島、掛合町、佐田町、大社町、平田市、出雲市、鹿島町、島根町、美保関町、石見町、安来市、玉湯町、益田市（以上いずれも島根県。下線は資料集未刊のところ）

（連絡先：〒690 島根県松江市西川津町 島根大学教育学部内）

《こえ》

いまやらなければ

野添 憲 治

最近、秋田県の阿仁マタギが脚光をあびている。映画になったり、テレビのドキュメンタリーが放映されたり、子ども向けの本が出版されるなどしている。ただ、残念なことは、正しい意味で「マタギ」と呼べる人は阿仁地域にいないのに、いまでも山岳を走っているように表現している。阿仁マタギの本拠地・阿仁町根子の仮の住民になってから、そんな風潮を見ながらニガニガしく思っていたが、ある日、阿仁マタギの最長老といっていた村田佐吉さん（87）に会ってマタギの話聞いていたら、これまで記録されていない話が次々ととびだしてくるのに圧倒された。それから佐吉さん宅通いをはじめたが、いまでもわからないところがあるとたずねている。

佐吉さんのほかにも、元マタギの老人が何人もいる。佐吉さんのあとはその人たちをたずねて、丹念に聞き取りをやっている。聞いているだけで、思わず体がのめり込んでいくような話が多い。わたしはかつての阿仁マタギの本拠地に月に1週間ほど住みながら、どうしてこんな宝庫にもっと早く手をつけていなかったのだろうと、その度に思ってしまう。どの人たちも70歳をこえているので、あと何年話を聞けるのかわからないのだ。

それにしても、マタギがいなくなってハンターだけがいるようになってから、どうしてこんな形で脚光をあびるのかなと思われて仕方がない。もしかすると、人間のいのちが尽きる瞬間に激しく燃えると聞いているが、一つの職業が消える瞬間にもそういうことがあるものだろうか。そうなのだとしたらよくわかるのだが、それにしても燃え方がおかしいと思う。それでも、このような形で知らせてくれたのだから、よかったなと思っている。しかし、自分の身辺を見ると、いまやらなければ消えていくもの、滅びてしまうこと、受け継がれなくなるものがなんと多いことだろうというのに気がつき、愕然とすることの多いこのごろである。急がなければ、と思う。（秋田県能代市）

会報「伝え」編集委員会

昭和63年度日本口承文芸学会大会予告

会報「伝え」の編集委員会は、小島美子(委員長)、大島広志、高木史人、中村とも子、間宮史子、宮廻和男で構成しています。「伝え」は、年2回(2月、9月)の発行です。会員のご寄稿をお待ちしております。会報編集にご協力いただける方は、学会事務局までご連絡ください。

とき：昭和63年6月4日(土)、5日(日)
ところ：島根県松江市 島根大学
研究発表、公開講演、懇親会その他。

大会の正式通知は後日発送致します。なお、前号で大会日程に誤りがありました。お詫びして、訂正致します。

新刊リストについて

紙面の都合により、新刊の一部を掲載します。口承文芸関係の新刊、雑誌(特集、論文、記事、書評など)、大学紀要、新聞記事などの資料をご提供ください。著書、抜刷などを学会にご寄贈いただきますようお願い申し上げます。

会費納入のお知らせ

1987年度末になりました。今年度会費未納の方は、至急納入をお願いします。本学会の会費は4,000円です。送金は郵便振替をご利用ください。(東京8-44834 日本口承文芸学会)

新刊リスト

- アフナーシェフ「ロシア民話集」(上、下) 中村喜和編 岩波文庫 岩波書店 87.11
民間説話の研究-日本と世界-(関敬吾博士米寿記念論文集) 同朋舎出版 87.9
説話の宇宙 小松和彦 人文書院 87.11
終末観の民俗学 宮田登 弘文堂 87.11
ときをとく-一時をめぐる宴 川田順造、坂部恵編 リプロポート 87.12
境界の昔話 武田正 山形民話の会 87.12
島根県八束郡玉湯町民話集 島根大学昔話研究会編 87.9
橋を架ける鬼(賀島飛左さんの昔話) 立石憲利 哲生町教育委員会 88.1
民話と文学(19) 民話と文学の会(東京都足立区千住曙町6-6-110) 88.1
昔話・伝説小事典 野村純一他編 みずうみ書房 87.11
やぶの民話(養父町文化財シリーズ17) 立石憲利 養父町教育委員会刊 87.3(寄贈)
宇部国文研究 第18号 宇部短期大学国語国文学会 87.3(寄贈)
紫苑(学会通信) 第17号 宇部短期大学国語国文学会 87.3(寄贈)
女川・雄勝の民話-語りによる日本の民話1- 松谷みよ子 国土社 87.6(寄贈)
佐井村のむかし(函館大妻高等学校研究集録 おおつま第1号抜刷) 久保孝夫、宮木清子 87.9
(寄贈)
要覧(1961-1986) ユネスコ東アジア文化研究センター 発行月不明(寄贈)
語りの世界(6) 語り手たちの会(保谷市新町4-12-25 桜井方) 87.9(寄贈)

入会希望者は入会申込書をご請求ください。入会金1,000円、年会費4,000円。

入会申込書請求・送金先：〒160 東京都新宿区西新宿8-4-5 (財)ラボ国際交流センター気付日本口承文芸学会事務局 (TEL. 03-367-2431) 振替：東京8-44834

The Society for Folk-Narrative Research of Japan, c/o Labo International Exchange Foundation, Labo-Center Bldg., 8-4-5 Nishishinjuku, Shinjuku, Tokyo 160, Japan.

口承文芸に関心のある方を広くご紹介ください